

# アンセルムスにおける真理概念

——命題の真理をめぐる一考察——

斎藤 大樹

## はじめに

本論の主題は『真理について』をはじめとする数点の著作において論じられているアンセルムスの真理論である。『真理について』はアンセルムスの思想全体に関わる「正直」(rectitudo)という概念がはじめて言及された著作であり、「信仰の知解」(intellectus fidei)へと進む前段階として、弟子の求めに応じ記された書である。そのため表現としては平易なものとなっているが、F. S. Schmittも指摘しているように、そこにおいて展開される議論は深い哲学的思索に基づいている<sup>1)</sup>。

ではその『真理について』において展開されている議論とはどのようなものであろうか。この書もまたアンセルムスの他の著作と同様、聖書の権威に頼ることなく議論が進められている。その内容は「神は最高真理 (summa veritas) である」とする『モノロギオン』における一つの証明から出発し、諸々の真理であるとされることを吟味することで、真理の定義を見出そうとするものである<sup>2)</sup>。その過程は諸々の事物のうちに善性の段階を見出し、それらを吟味し、手がかりとすることによって、あらゆる善とされる事物を基礎づける「最高に善なるもの」(aliquid summe bonum)である神を推論した『モノロギオン』における神の存

1) テクストは主としてシュミット新版 (*Anselmi Cantuariensis Archiepiscopi Opera Omnia*, Tomus Primus, hrsg. von Franciscus Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt 1968.) を用いた。

以下においては“*Opera Omnia*”と略す。

Anselm von Canterbury, *De veritate*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1966, S. 7.

2) *De veritate*, in: *Opera Omnia*, 176, 6-19.

在証明と類似しており、『真理について』においてもまた、最終的には、あらゆる真理とされるものはその最高真理に従って (secundum summam veritatem) 存在することによって真理となることが述べられている。その過程においては、従来の神学に属するような用語、表現は慎重に避けられており、その点においてもアンセルムスの他の著作との共通点を見出すことができる。

以上のような共通点を持ちつつも、従来の研究において、この『真理について』は他の著作に比べて、取り上げられることが少なかった。特に本論で取り上げる命題の真理 (veritas enuntiationis) については、『真理について』においても第一に取り上げられる真理であることもあり、諸々の議論の前段階として言及されるに過ぎないことが多い。例えば T. Williams は命題の真理の持つ奇妙な点に言及しつつも、重要なものではないとして議論を進めている<sup>3)</sup>。また H. Külling は『真理について』の重要性を指摘し、命題の真理についても考察しているが、最高真理との関わりという点で、その考察は不十分であるように思える<sup>4)</sup>。

では命題の真理は最高真理をはじめとする諸々の真理を論ずるための前段階にすぎないのだろうか。その問いに対しては明確に否定することができよう。というのは、命題の真理は『真理について』の冒頭で論じられ、一応の結論が出たにもかかわらず、その後の議論においても度々登場しているからである。本論ではその中でも特に、諸々の真とされる行為について論じた行為の真理 (veritas actionis) についての議論の中で、命題の真理について触れられた「行為の真理には自然なものとは自然でないものがあるのは明らかで、この自然な行為の真理の内には、前に考察した、命題と不可分な命題の真理を入れなければならない」<sup>5)</sup>という記述に注目し、論述を進めることにしたい。

そのための議論の手順は次のようなものとなる。まず第一章において、アンセルムスが『真理について』において第一に命題の真理について論じた理由を明確にしておきたい。アンセルムスが『真理について』にお

3) S. Visser and T. Williams, "Anselm on truth," in: *The Cambridge Companion to Anselm*, Cambridge University Press, 2004, p. 208.

4) H. Külling, *Wahrheit als Richtigkeit*, Bern 1984, S. 64.

5) *De veritate*, in: *Opera Omnia*, 183, 1-3.

いて第一に命題の真理を取り上げたのは、諸々の真理についての議論に進むための前段階として適切であったという理由のみではなく、『真理について』以前に著された『モノロギオン』における神の存在証明において、命題の真理がある重要な役割を果たしているためである。その役割について考察することにより、命題の真理について論じることの重要性もより明らかになると考えられる。次に第二章において、ある命題(enuntiatio)が真であるという場合、命題の真理と表示の真理(significationis veritas)という二つの真理が存在していることを示し、本論の主題である命題の真理が、命題が命題である限りにおいて成立する真理であることを明らかにする。さらに第三章において、行為の真理についての議論から、その真理が自然的なものと非自然的なものとの二つの種類に分類されることを示し、命題の真理が属しているとされる自然的なものとしての行為の真理について考察する。最後に第四章において、ここまで論じてきた諸々の真理を最高真理との関わりから捉えなおし、命題の真理もまた最高真理に従って存在することによって真理となることを示すことで、アンセルムスの従来の研究に新たな視点を加えることを試みたい。

### 第一章 『モノロギオン』における真理論

アンセルムス自身が『真理について』の第一章において『モノロギオン』において命題の真理を用いて証明を行ったと述べているように、命題の真理については『モノロギオン』において初めて触れられている。周知のとおり『モノロギオン』はアンセルムスが「理性のみによって」(sola ratione)神の存在証明を試みた書であるが、その証明は後に書かれた『プロスロギオン』における神の存在証明とは異なり、複雑な構成になっている。命題の真理が言及されているのは、『モノロギオン』において展開された神の存在証明の一部であり、第十八章における「最高の本性」(summa natura)の永遠性についての証明である。この証明においてアンセルムスは最終的には神であるとされる「最高の本性」には始まりも終わりもないことを明らかにしている。

「最高の本性」とは『モノロギオン』の最終章において神であることが言明される存在である。アンセルムスは長大な『モノロギオン』における神の存在証明の始めの部分で、全ての存在する事物がそれによって

存在するところの存在を見出し、そのような存在を全ての存在する事物の中で最高の存在であるとして「最高の本性」と呼んでいるのである。そしてすでに述べたように、この第十八章の証明は、その「最高の本性」が始まりも終わりもない永遠の存在であることを示そうとするものである。それがどういった手順によって証明されるのか、という問題については本論の主題とは直接の関係が無いため説明を省かざるをえない。しかしながら確実に言えることは、アンセルムスはこの証明において「最高の本性」が始まりも終わりも持たない永遠の存在であることを明確に証明している、ということである<sup>6)</sup>。その意味において、神の永遠性を示したこの証明は『モノロギオン』における神の存在証明の中でも重要な位置を占めるものであるということが出来る。ではこの証明と『真理について』において展開されるアンセルムスの真理論はどのような関わりを持つものなのであろうか。

アンセルムスは『真理について』の冒頭において、この第十八章の証明の最後の部分を引用しており、真理論と関わるのはこの部分である。すなわち第十八章の後半部分において、アンセルムスは「真理」もまた「最高の本性」と同様に、永遠の存在であることを証明しようと試みるのである。しかし「最高の本性」の永遠性を証明した前半部分と「真理」の永遠性を証明した後半部分は、一見すると直接的には無関係であるようにも見え、「真理」についての問題提起は唐突であるようにも思える。なぜアンセルムスは「最高の本性」の永遠性に関する証明の後半部分で、「真理」の永遠性について言及しなければならなかったのであろうか。その問題はアンセルムスが『モノロギオン』において試みようとした神の存在証明全体の構成と関わる問題である。

アンセルムスは『モノロギオン』において神を多くの表現で言い表している。その一つの例として、全ての存在に存在を与える「最高の本性」が挙げられるのだが、その他にも、第一章の証明においては神を、あらゆる善とされるものがそれに与ることによって善となりうる「最高に善なる存在」などと表現している。アンセルムスが多様な表現で神を言い表したのは、『モノロギオン』における神の存在証明が、神に関わ

---

6) *Monologion*, in: *Opera Omnia*, 32, 7-33, 8.

る可能な限りの事柄を証明しようとしたためであると言うことができる。すなわちアンセルムスが証明しようとしていたのは「最高の本性」としての神でもあり、「最高に善なるもの」としての神でもあり、さらにはその他の諸々の表現としての神だったのである。そのことはアンセルムスが『モノロギオン』の後半部分において三位一体論を展開し、「三位一体」としての神という奥義さえも証明の対象にしていたことから明らかであり、アンセルムスがあらゆる視点から神を理解しようとしていたことを表すものであると言えるだろう。事実、アンセルムスは『モノロギオン』の第十六章において、最高の本性は最高の正義、最高の善、最高の永遠、最高の美等々と述べており、その中には最高の本性は最高真理であるという言葉も含まれている。

以上のようにアンセルムスは『モノロギオン』における神の存在証明の中で、神を様々な言表を用いて論じているのであるが、そのことからアンセルムスが真理の永遠性について論じた理由は明らかになるだろう。すなわちアンセルムスは「最高の本性」が全ての真理とされるものを真理たらしめる「最高真理」でもあることを示すことによって、神の永遠性についての理解をより確かなものにしようとしていたのである。それこそがアンセルムスが神の存在証明の中で真理論を展開しなければならなかった理由であると言えよう。では「最高真理」が永遠の存在であることは、どのようにして証明されているのだろうか。この証明を見ていくことによって『モノロギオン』における神の存在証明と命題の真理の関わりを明らかにすることができるだろう。

真理がもし始まりを持つならば、真理が存在する以前には、あらゆる真理とされるものが存在していないことになる。しかしながらそのような場合においても「真理は存在しない」ということは真理であるとしなければならない。つまり真理が存在する以前には「真理は存在しない」ということが真理となり、矛盾が生じてしまうのである。このようにして真理が始まりを持つということは否定されなければならない。同様に真理が終わりを持つということも否定されることは容易に理解されるであろう。真理が存在した以後、つまり真理が失われた時には「真理が失われた」ことが真理となるからである。したがって真理は始まりも終わりも持たない永遠の存在であると言うことができるのである。この証明

の最後においてアンセルムスは次のように述べている。「真理はそれに始まりと終わりがあるとと言われても、無いと理解されても、どのような初めにもまた終わりにも制約を受けることはない。同じ結論は『最高の本性』に関しても下される。それは『最高真理』だからである<sup>7)</sup>。真理が永遠の存在であるためには、全ての真理を真理たらしめる永遠の存在が存在していなければならない。このようにして「最高真理」が存在することは示されているのである。

以上のようにして、全ての真理とされるものを真理とする「最高真理」は、全ての存在するものに存在を与える「最高の本性」と同様に、永遠の存在であることが明らかになった。これらのことからアンセルムスが命題の真理を重要なものと考えていたことを見て取ることができるだろう。すなわち『モノロギオン』における神の存在証明の重要な位置を占めている神の永遠性について、アンセルムスは「真理は存在しない」という命題を用いることによって、明らかにしたのである。そしてこの証明から得られた「神は最高真理である」という結論に基づき、『真理について』の議論は始められる。そしてある命題が真であるという場合、そこには二つの真理が存在していることが明らかにされるのである。次章においてはここまでの議論において明確に区別されていなかった命題の真理と表示の真理という二つの真理について考察する。

## 第二章 命題における二つの真理——命題の真理と表示の真理

アンセルムスにおいて真理概念は、アンセルムスの思想全体を支える正直という概念と深い関わりを持つ。そのことはアンセルムスの主著である『モノロギオン』や『プロスロギオン』では直接的には触れられていない正直について『真理について』においては度々言及されていることから明らかであろう。そこでまず本題に入る前に、この正直という概念について確認しておくことにしたい。

正直についてはアンセルムスのいくつかの小論において言及されており、真理論のみならず、神の存在証明をはじめとするアンセルムスの思想全体と深く関わる概念である。正直とはあらゆる事物が自身の「為す

---

7) *Ibid.*, 33, 20-23.

べきこと」(quod debet)を為すときに成立するものであるとされる。ここで言われる“debere”とは「あるものの義務とされること」とも言い表すことができるだろう。すなわち正直とは諸々の事物がその事物自体の「義務とされたこと」(debitum)を果たすことによって成立するものであると行うことができる<sup>8)</sup>。そしてアンセルムスは『クール・デウス・ホモ』において、人間の為すべきことは「われわれが神に対し為すべき義務」(debitum quod deo debemus)を果たすことであると明確に述べている<sup>9)</sup>。では人間も含む世界に存在する諸々の事物が持つ義務とは何であろうか。その問いは『モノロギオン』における神の世界創造に関する証明から明らかになるだろう。アンセルムスはその証明において、事物は神の内なる本質に類似したものとして存在を与えられ、事物の本来的な姿は神の内にある、ということ述べている。そしてこの神の内にある事物の本来的な役割に従うことがあらゆる事物の義務であるとされる。つまり正直とは、諸々の事物が、神によって義務とされた本来的な役割を果たすときに成立するものなのである。

ではその正直と真理はどのように関わるのだろうか。その問いに対してアンセルムスは「真理と正直は別のものではない」<sup>10)</sup>あるいは「思考の真理は思考の正直である」<sup>11)</sup>と述べ、正直と真理は同一のものであると度々述べている<sup>12)</sup>。つまり諸々の事物が自分自身の「為すべきこと」を為すときに正直が成立するのであり、あるものが正直に沿って物事を為すときに、そのものの真理が成立するということになるのである。

以上のことを踏まえて、アンセルムスはある命題が真であるとされる事態について考察する。われわれは日常的な生活において、様々な命題を用いている。換言するならば、われわれは命題(enuntiatio)を発することによって、何らかの物事をしばしば表明しているのである。『真理について』におけるアンセルムスの議論は、われわれの日常的な経験

8) 小野忠信『アンセルムスの神学』新教出版社、1985年、160頁。

9) *Cur deus homo*, in: *Opera Omnia*, 68, 10-12.

10) *De veritate*, in: *Opera Omnia*, 178, 25.

11) *Ibid.*, 180, 11-12

12) ただし注意しなければならないのは、「ある命題が真理である」という事態について考察する場合には、正直と真理は一致するものとして考えられるのであるが、後に触れる非自然的なものの真理の場合には両者は必ずしも一致しないということである。



に訴えかけながら、考察が進められていく。当然のことながら、命題の真理についての議論も、その例外ではなく、命題を発した際のわれわれの経験を基にその議論は行われるのである。では、われわれが命題を発した時、その命題が真であるとされるのは、どのような場合であろうか。それは、一般的に言って、その命題が表示する内容と、指し示す事態とが一致している場合であると答えられるだろう。すなわち「存在するもの」に対し「あるものが存在する」と表示する場合、一般的にその命題は真であるとされるということである。仮に私が「今は日中である」と表示した場合、事実として今は日中であるため、この命題は「為すべきこと」を為しており、真であるとされるのである。それに対し「今は夜である」と表示した場合、事実として今は夜ではないために、「為すべきこと」を為しておらず、この命題は偽であるとされる。このように、命題が表示する内容と外的な事態の一致が真理であるとする考えは一定の妥当性があると言える。この点においてアンセルムスは存在するものを存在すると表示し、存在しないものを存在しないと表示する時、真理であるとする真理観を受け継いでいる<sup>13)</sup>。

しかしその一方で次のような疑問が提示される。命題は「存在するもの」に対して「あるものが存在する」と表示することができると同時に、事実として「存在していないもの」に対しても「存在する」と表示することができる。すなわち命題は「存在するもの」に対しても、「存在しないもの」に対しても、同じように「あるものが存在する」と表示する能力を持っているのである<sup>14)</sup>。先の例で言うならば、「今は夜である」と表示した命題は、事実として「今は夜ではない」場合には、誰もがその命題が指し示す事態を理解していながら、外的な事態に一致していないために真理ではないとされなければならないのである。では外的な事態と反することを表示する命題はいかなる意味においても偽であるとされなければならないのだろうか。

この問いに対して、アンセルムスは次のように答える。ある命題が真であるとされる場合、その命題には二種類の真理が関わっており、それ

13) Aristotle, *Metaphysics* 4 · 7 (1001b25-28).

14) *De veritate*, in: *Opera Omnia*, 179, 8-9.



らは分けて考えられなければならない。それらの真理をアンセルムスは命題の真理と表示の真理と呼んでいる。一般的に言って、ある命題が真理であるとされる場合の真理とは後者の表示の真理である。表示の真理とはその命題が表示する内容と外的な事態が一致しているときに成立する真理であり、「存在するもの」を「存在する」と表示するとき、その命題は真であるとされる。それに対し命題の真理とは、ある命題が正しく外的な事態を表示しているときに成立する真理ではなく、ある命題が意味をなしている場合、つまり命題が命題そのものとして成立している場合、外的な事実とは無関係に成立する真理なのである。すなわち、ある命題が「あるものが存在する」と表示する時、そのものが事実として存在していようと、存在していなかろうと命題の真理は成立する。先の例で言うならば「今は日中である」という命題は、事実として今は日中である場合、表示の真理と命題の真理という二つの真理を有するのだが、その場合においても「今は夜である」という命題は何らの真理も有さないのではなく、命題の真理を有するとされるのである。つまり命題の真理のみに限って言うならば、命題が表示する内容と外的な事態の一致は問題とはされず、全く外的な事態とは一致していない事実を表示している場合であっても、この意味において、命題の真理は成立する。それに対し表示の真理はその命題が表示する内容が、外的な事態と一致している場合にのみ成立するのである。したがって、ある命題が真であるとされる事態を考えると、まず命題が命題そのものとして意味を有したものであると認められ命題の真理が成立した後に、その命題が指し示す内容が外的な事態と一致していることが確認され表示の真理が成立し、両者が共に成立するときに、その命題は真であるとされる。つまりある命題が真であると言われる場合、そこには二つの真理が存在していなければならないのである。

表示の真理によってある命題が真であるとされるのは、一般的に考えても妥当であろう。命題が表示している内容と外的な事態が一致していれば、その命題が真であることは明白だからである。このことはわれわれの日常的な経験と照らし合わせても、理解することは決して困難ではないであろう。問題となるのはもう一方の命題の真理である。外的な事態と全く一致していない内容を表示している命題が、ある種の真理を有

しているとするのは、一般的な視点から考えると奇異なことのように思えるだろう。日常において問題とされるのは、その命題が指し示す内容が外的な事態と一致しているか、否か、ということだからである。その問題に加え、さらに奇妙なことに、アンセルムスは、行為の真理についての議論の中で、この命題の真理が自然的なものの行為の真理に属しているとするのである<sup>15)</sup>。このことから次の問題が生じるだろう。すなわち命題に対し真理という語を用いて、その命題の真偽を問うのは、日常的な表現としても妥当であるが、ある行為に対して真理という語を用いるのは不適當ではないか、という問題である。われわれは何らかの行為に関して、善悪を問うことはあっても、真偽を問うことはしないからである。この問いに答えるため、次章においては、行為の真理についての議論から、命題の真理が属するとされる自然的なものの行為の真理について考察する。

### 第三章 行為の真理——自然的なものと同自然的なもの

ある命題が真であるという事態について考察する場合、「真である」あるいは「真理」という表現を用いることは一般的に考えて妥当であろう。命題については、その命題が指し示していることが真であるか、あるいは偽であるか、ということが問題になりうるからである。しかしある行為に対して真偽を問うことは、日常的な表現としては不適當であるように思える。ある行為が真である、あるいは偽であるという表現は、通常は用いられるものではないからである。しかしアンセルムスはたしかに「真理は行為の内にも存在することを信じなければならない」<sup>16)</sup>と述べ、行為についても問うべき真偽が存在するとしている。ではアンセルムスはどのような意味において、ある行為の内に真理が存在し、ある行為が真であると言われうると考えていたのだろうか。そのことを明らかにするためには、前章において述べた正直と真理の関係を振り返る必要があるだろう。

そもそもアンセルムスにおいて真理とは「神に対して為すべき義務」

---

15) *Ibid.*, 183, 2-3.

16) *Ibid.*, 181, 12.

を果たすことによって成立する正直であり、「為すべきこと」を為すときに成立するものであった。すなわち命題の場合であれば、命題が表示すべきことを表示することによって表示の真理が成立していたのである。このことを行為の真理に置き換えるならば、ある者が行為すべきことを行為する時に、その行為は真であるとされ、行為の真理は成立すると言うことができるだろう。そしてこのことが前章の最後にあげた第一の疑問への答えとなる。すなわちある行為が真か、偽かと問うことは日常的な表現としてはたしかに奇妙なことではあるが、「為すべきこと」を為すことによって、ある行為がそのものの本来的な役割と一致し、真であるとされる、という観点から見ると、行為に対して「真理」という表現を用いることは適当なのである。

しかしながらアンセルムスはここで問いを発する。すなわち「為すべきこと」を為していれば、その行為はいかなる場合においても真理とされるのか、という問いである。たしかに人間の行為のみを考えるのであれば、「為すべきこと」を為すとき、その行為は真であると言うことができるだろう。では自然的なものの働き (actio) に対して行為の真理を適用することはできるのであろうか。結論から言えば、アンセルムスは自然的なものの働きについても、行為の真理は適用できると考えていた。すなわち自然的な行為の真理もまた、人間の行為の真理と同様に成立しうるのである。

以上のことを踏まえて、アンセルムスは次のような疑問を提示している。すなわち炎が何かを熱している時、その炎の行為の真理は成立していると言えるのか、という問いである<sup>17)</sup>。この場合炎はある物を熱するという行為をしていることになる。すでに述べたように、存在する事物はその本質を神の内に有しているのであり、それは炎においても同様であるから、炎が何ものかを熱する時、「神に対し為すべき義務」を果たしており、これまでの議論に基づくならば炎の行為は真であるということになる。一般的に言って炎が何ものかを熱することを、真理であると考えるのは奇異なもののように思われるが、アンセルムスもその点は認

---

17) *Ibid.*, 181, 31-182, 2: "et est irrationalis actio, ut actio ignis qui calefacit. Vide ergo an convenienter dicamus ignem facere veritatem."

めている。そのために自然的なものの行為の真理における表現については日常的な表現を離れざるをえないとしていたのであり、その意味においては炎の行為の真理は成立していると言われるのである。このことは人間を除く全ての存在する事物の行為に対して適用される。炎が炎として、動物が動物として行為する限りにおいて、そのものは正しく行為しているのであり、真理を有しているとされるのである。

以上の事から自然的なものの行為と非自然的なものの行為の相違については明らかであろう。人間は自らの意志に従って義務とされた本来的な役割を放棄することが可能であり、非自然的なもの、すなわち人間の行為の真理は、その真理が成立しないこともありうる真理である。換言すれば人間は自らの意志によって「神に対して為すべき義務」を果たさないことが可能なのである。その意味では非自然的なものの真理は、成立しないこともありうる偶有的な真理であると言える。それに対し、前述の炎の例で言うならば、炎は存在するとき、何ものかを熱しないということが不可能なのであるから、自然的なものの行為の真理は、成立しないことがありえない真理である。換言すれば自然的なものは「神に対して為すべき義務」を果たさないということが不可能であり、その意味において自然的なものは必然的に行為し、真でないことができず、必然的に行為の真理が成立すると言えるのである。行為の真理が成立することが必然的であるか、偶有的であるか、という点において自然的なものとは非自然的なものには決定的な差異が存在しているのである。

このような差異を考えると、命題の真理が自然的なものの真理に属するという点に対しては疑問が生じるだろう。というのは命題の真理が自然的なものの真理の一つであるのならば、われわれが日常的に使用している命題は、他の自然的なものと同様に、必然的に真理を有することになるからである。このことはわれわれが度々、命題を誤って使用することを考えると、納得しがたいことではないだろうか。しかし命題の真理を、自然的なものの行為の真理に属するとアンセルムスが考えていたことは、『真理について』における幾つかの記述から明らかである。さらにアンセルムスが全ての真理を最高真理である神に基礎付けられるとしていたことを考えると、命題の真理が必然的に真理を有するという点とは、一層奇異なことであるように思えるのではないだろうか。そこで

次章においては最高真理との関わりから、命題の真理について論ずること、命題の真理が必然的に成立する真理であることを明らかにしたい。

#### 第四章 最高真理に対する命題の真理の関わり

アンセルムスは行為の真理に関する議論の中で「自然な行為の真理のうちには、まえに考察した、命題と不可分な命題の真理を入れなければならない」<sup>18)</sup>と述べている。この記述からも、アンセルムスが命題の真理が自然的なものの真理に属し、真理が成立しないことが考えられないものであるとしていたことは明白であろう。しかし我々が日常的に用いる命題が、自然的なものに属していると考えるのは、奇妙なことのようにも思える。命題が炎や石のように、人間とは無関係に存在している事物であるとは考え難いことだからである。では、アンセルムスはいかなる意味において、命題の真理が自然的なものの行為の真理に属すると考えていたのだろうか。

ここで再び思い出さなければならないのは、アンセルムスにおいて真理とは正直であり、正直は諸々の事物が神によって義務とされた本来的な役割を果たすときに成立するものである、という正直と真理の関わりである。すでに述べたようにアンセルムスは『モノロゴオン』において、神は全ての事物を自らの内なる本質に従って創造したことを明らかにしており、その神の内なる本質に従って存在するとき、事物は正直を実現し、真の意味において存在するとされる。アンセルムスはそのことについて『真理について』においても「全ての存在するものは、最高真理の内に存在する限りにおいて、真に存在する」<sup>19)</sup>と述べており、最高真理である神の内なる本質に従って存在することで、諸々の事物は真に存在するようになると考えたのである。

このことを命題の真理において考えると次のようになる。命題の真理が自然的なものの行為の真理に属するならば、それは炎が炎である限りにおいて成立する自然的なものの行為の真理と同様でなければならないということになる。したがって命題が最高真理である神の内なる本質に

---

18) *Ibid.*, 183, 2-3: "sub naturali ponenda est illa veritas orationis, quam supra vidimus ab illa non separari."

19) *Ibid.*, 185, 15.

従って存在することは必然的であり、そのために命題の真理は必然的に成立する真理であるということになるのである。しかしこのことは命題がしばしば誤って使用されることを考えると、容易に納得できることではないだろう。たしかに炎は存在する限りで何ものかを熱するものであり、その意味において炎は必然的に「為すべきこと」を為し、必然的に真理が成立するということが理解できることである。命題をこの炎と同様のものと考えるのであれば、命題もまた必然的に「為すべきこと」を為し、それによって命題の真理が成立していると言うことにならなければならない。ではこの命題の「為すべきこと」とは何を意味しているのだろうか。

一般的に考えて、命題とは何事かを表示するものであり、それはアンセルムスにおいても例外ではない。そのことはある命題が真であるとする事態を考察した時に、命題は表示すべきことを表示したときに一つの真理が成立するとしていたことから明らかであろう。このことから考えると、命題は表示すべきことを表示する限りにおいて、「為すべきこと」を為し、一見するとそれによって命題の真理が成立するように考えられる。しかしながら注意しなければならないのは、ここで言われている表示すべきことが、外的な事態を指すのではないということである。命題が外的な事態を表示することによって成立する真理は、表示の真理として命題の真理とはすでに区別されているからである。したがって命題の真理を成立させる表示すべきことは外的な事態とは別に求められなければならない。

では命題が何らかの意味を有するものとして存在し、命題として成立するのは、何を表示することによってなのだろうか。表示の真理のように成立する原因を外的な事態に負っている偶有性を免れることができない。ここに至り、あらゆる事物の「為すべきこと」が最高真理の内なる本質によって規定されていたのと同様に、命題についてもまた、その「為すべきこと」を最高真理の内に求めなければならない。すなわち命題は最高真理の内に規定された意味すべきことを表示することによって、最高真理の内なる正直に従って存在することになり、命題として成立するとされるのである。そしてこの意味の正直は命題に対応した外的な事態が存在しなくとも存在するものであるのみならず、命題そのものが失



われても存在し続けるものであるとされる。

例えば今私が「今は日中である」という命題を発する場合を考えてみよう。私がこの命題を発した時、この命題の意味が存在することは明らかであろう。では仮に私がこの命題を発しなかったならば、この命題の意味もまた失われるのだろうか。この問いに対しアンセルムスはたとえ命題が発せられなくとも、その命題の意味が失われることはないとする。というのは、たとえこの「今は日中である」という命題が発せられなかったとしても、この命題が真である（事実との一致ではなく、命題そのものとして真である）こと、つまり命題の意味そのものは失われなからである。われわれは日常的に様々な命題を発している。その際、その命題はわれわれが外的な事態に従って命題を発したがゆえに、真理を有するのではない。命題は外的な事態とは無関係に、命題そのものが意味すべきことを表示するときに、最高真理の内なる正直に従って存在することになり、命題の真理が成立すると言えるのである。

このことは外的な事態と必然的に一致する命題においては、より一層明確であろう。例えば「人は動物である」という命題の意味は、たとえ命題が発せられなくとも失われることはなく、その命題が必然的に真であるとされるのは、最高真理の内なる正直に従って命題が存在しているからである。同様に「今が日中である」という命題は、たとえ事実としては日中ではなかったとしても、事実としてありうる事態を指し示しているものであり、外的な事態と偶有的に一致しうる命題である。それゆえこの命題もまた、命題そのものとしては必然的に真であるとされるのである。それに対し、外的な事態と必然的に一致しない命題、例えば「人は石である」という命題は、たとえ命題として発せられたとしても、正直に従って存在するものではなく、意味すべきことを最高真理の内に持たない。したがって厳密な意味においては命題として成立しているとは言えないのである。換言すると、命題とは単にわれわれが発することによって存在するようになるのではなく、われわれが最高真理の内なる正直に従って発することによって存在するものであると言える。われわれはたしかに正直に従わない文言を発することが可能である。しかしそれは最高真理との関わりを全く持たず、いかなる真理も有することのない空虚な文言に過ぎないのである。



以上の議論をまとめると次のようになるだろう。すなわち命題とは外的な事態に対応して存在しているのではなく、最高真理の内なる正直に従って存在している。そしてこの正直は命題が存在しなくとも、決して失われることがないのである。換言するならば、命題は、最高真理の内において規定された意味すべきことを表示することによって、命題として成立している。そしてこれまで論じてきた「為すべきこと」を為すことが最高真理である神の内なる本質に従うことであったのと同様に、命題も意味すべきことを表示することによって真であり、命題の真理が成立する。命題の真理は、決して失われることのない最高真理の内なる意味の正直に従って存在するがゆえに、必然的に成立する真理とされるのである。

そしてこの命題の成立する根拠すらも最高真理である神の内に求めようとするところこそが、アンセルムスにおける命題の真理の特異な点であると言える。神の内なる正直に従っている命題は神によって「表示する力を本性的に与えられている」<sup>20)</sup>のであり、意味すべきことを必然的に意味しているのである。

### おわりに

本論ではアンセルムスにおける真理概念について命題の真理を中心に考察した。まず第一章においては『モノロギオン』における神の存在証明の中で、ある命題の真偽を問うことによって、神の永遠性が証明されていることを確認し、神の存在証明において命題の真理が果たしている役割について考察した。次に第二章においては、ある命題が真であるとされる場合、そこには命題の真理と表示の真理という二つの真理が存在していることを示した。表示の真理が、表示する内容と外的な事態との一致という伝統的な意味での真理であるのに対して、命題の真理は、命題が成立する限りにおいて存在するアンセルムスに固有の意味の真理であることを明らかにした。続く第三章においては、その命題の真理が、自然的なものの行為の真理に属することを示した。命題の真理は、自然的なものの行為の真理と同様に必然的に成立するものであることを明ら

---

20) *Ibid.*, 183, 6.

かにした。最後に第四章において、命題の真理について最高真理との関わりの中で考察することにより、命題は最高真理の内において規定された意味を表示することによって、最高真理の内なる正直に従って存在するようになり、命題として成立することが明らかになった。

以上の論述から、冒頭において述べた「行為の真理には自然なものと同様にないものがあるのは明らかで、この自然な行為の真理の内には、前に考察した、命題と不可分な命題の真理を入れなければならない<sup>21)</sup>」という記述の意味するところは、以上のようにして明らかになった。ある命題が真であるとされる事態には、必然的に成立する命題の真理と外的な事態との一致により成立する表示の真理が関わっている。そしてその命題の真理は他の自然的なものと同様に、つねに「為すべきこと」を為すものであり、必然的に真に存在するものであるとされる。最高真理の内なる正直に従い意味すべきことを表示することで、命題は命題となり、外的な事態とは無関係に命題の真理は成立する。アンセルムスにおいてはわれわれが用いる命題もまた最高真理である神に根拠づけられるのである。

周知の通り、アンセルムスの思想は「信仰の知解」という言葉で最もよく表される。しかしある命題が真であるとされる事態を考察する場合、この「信仰の知解」という姿勢は一見すると無関係であるようにも思える。事実、アンセルムスも命題に関わる二つの真理を論ずる際には、最高真理である神との関わりに触れずに、外的な事態との一致という観点からそれらを論じていた。しかしこれまでの議論を辿ってくれば、その見方が一面的であったということが理解されるであろう。アンセルムスにとっては命題の真偽という問題すらも最高真理である神と密接に関わる問題であった。その意味では「信仰の知解」へと進み、神についてより深く理解するための前提の一つであったとも言えるのではないだろうか。

---

21) *Ibid.*, 183, 1-3.